

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第 48 号
2019 年 7 月

目 次

[書評]

スキナーの今——Quentin Skinner, <i>From Humanism to Hobbes: Studies in Rhetoric and Politics</i> を読む	
岡田拓也.....	1
帝国の歴史学——Amanda Behm, <i>Imperial History and the Global Politics of Exclusion: Britain, 1880-1940</i> を読む	
馬路智仁.....	2
グラムシは二度死ぬか——Mark McNally ed., <i>Antonio Gramsci</i> を読む	
千野貴裕.....	3

[会務報告]

2018 年度第3回理事会議事録	6
2018 年度会計報告書	7
2019 年度予算案	8
2019 年度第1回理事会議事録	9
政治思想学会「学会報告奨励賞」(2019年度)のご案内	11
第27回研究会「公募パネル」応募者募集のお知らせ	12
第27回研究会「自由論題」報告者募集のお知らせ	14

スキナーの今

—Quentin Skinner, *From Humanism to Hobbes: Studies in Rhetoric and Politics* (Cambridge University Press, 2018) を読む

岡 田 拓 也 (大東文化大学)

本著は政治思想史研究の第一人者として広く知られるクエンティン・スキナーによる最新の論文集である。スキナーは以前にも3冊の論文集 *Visions of Politics* (『政治のビジョン』) を刊行している。今回の著作はそれ以後に発表した論文のうち、再公刊する価値があるものを選別し大幅な加筆修正を加えてまとめたものである。

取り上げられているテーマは、レトリックやマキアヴェリ、シェイクスピア、イギリス革命期の政治思想、ホップズ等、スキナーの幅広い関心と深い学識を反映している。ミルトンに関する論文では伝記研究を行う力量も披露されている。以上のような幅広いテーマに触れる一方で、この著作の半分以上はホップズ研究にあてられている。スキナーは、遙か半世紀近く前に公表された論文 “Conquest and consent: Hobbes and the engagement controversy” (『征服と同意——ホップズとエンゲージメント論争』、*Visions of Politics* 第3巻所収) を始め、*Reason and Rhetoric in the Philosophy of Hobbes* (『ホップズ哲学における理性とレトリック』) などホップズの新たな側面を浮き彫りにする重要な研究を発表し続けてきた。本論文集は後者の著作と同様に、人文主義由来のレトリックの各手法をホップズがいかに用いたかを詳しく示しており、この点にスキナーのホップズ研究の特色が見られる。同時に本著作は、この着眼点の有効性がホップズにとどまらずマキアヴェリやシェイクスピアにも及ぶことを例証する。例えば『ヴェニスの商人』の法廷シーンの背景にあるのは、当時の法廷の慣習そのものではなく、法廷弁論に関してのレトリックの教本だと主張する。

本著に収録された論文で一際目を引くのは、ホップズの諸著作の扉絵を取り上げた90ページ近くに渡る長大な論文である。『リヴァイアサン』

の扉絵については、既にマルコムの非常に優れた研究がある。しかしスキナーは、『リヴァイアサン』以前のホップズの著作——ツキディデス翻訳や『市民論』——についても考察を加えることで、ホップズが主要著作で用いた扉絵の全体像を提示する。またそのような扉絵が人文主義由来の長い伝統に由来し、レトリックの理論に基づくことを示している。とりわけ、ホップズ以前の著作の扉絵にホップズの扉絵に類似した側面を持つものがあることを指摘する。このような扉絵への着目は思想史一般においても例外的であり、その意味でも興味深い。

ホップズ研究としてのスキナーの論文が優れているのは、ホップズのコンテクストとして吟味する範囲が17世紀イングランドにとどまらず、年代および地理上において広範囲なことである。ホップズの歴史的脈絡に着目することそれ自体は、既に確立した研究手法となって久しい。またホップズのコンテクストとしてイングランド内戦に目を向けることも、スキナー以外の多くのホップズ研究者が行っている。だがスキナーは、イングランド内戦とホップズに至るまでの議論の系譜を、古典古代、ルネッサンス、チューダー朝期のイングランドなど丹念に追う。これによりホップズに至るまでの議論の厚みを示すと共に、その伝統の上に立つホップズの独創性と意義を充分に明るみに出しているのである。これはホップズの代表論と人格 (person) 論を検討する各論文を見て取れる。国家 (state) 概念に関するホップズの独創性の意義を探る12章の論文では、スキナーはさらにホップズ以後現代政治学に至るまでの系譜も吟味しており、その学識に舌を巻かざるを得ない。

このように本書は、ホップズ研究者にとっての必読本であると同時に、優れた思想史研究の見本としても一読に値すると言えよう。

帝国の歴史学

—Amanda Behm, *Imperial History and the Global Politics of Exclusion: Britain, 1880-1940* (Palgrave Macmillan, 2018) を読む

馬 路 智 仁（東京大学）

近年、啓蒙期を主たる対象に「政治思想としての歴史叙述」研究が著しく進展した。しかし、かかる分析視角は啓蒙期研究の専売特許というわけではない。本書は19世紀最後の四半世紀から20世紀前半におけるイギリス帝国思想に焦点を当て、そこでいかなる歴史叙述が展開され、その叙述が同国の帝国政策や統治をどのように帮助したかを分析する。明らかとなるのは、上記時期における帝国史・植民史という学問分野の発展、その学知に基づく帝国領域の分節化（階層性や差異の創出・正当化）、特定の人々の脱主体化、人種主義、および同時代の外交・国際政治的動態、これらの間の複雑な結びつきの有り様である。

本書の特徴は、2000年代以降の潮流である「殖民世界（settler world）への転回」*に対して一定の修正を促す点にある。殖民世界の焦点化は、その世界が歴史的に関与してきたそれ以外のイギリス帝国領域（の人々や資源）に対する不正義を分析枠組みの外へ周縁化する傾向がある。それを改め、世界大戦を挟む時期に殖民世界と従属帝国（subject empire）の間の階層的関係がどのように固着、また流動化したか、そしてそこにおいて帝国史・植民史という知がいかなる形で関与したかを明確にすべきである、と著者は主張する。

本書は全8章から構成される。まず第1章では、本書全体の主張、すなわち「帝国史」という新分野（1870年代以降台頭し、初期は「植民史」とも呼ばれた）がイギリスの多くの知識人や政治家に対して、各々の抱く帝国の将来像を唱道する上で重要な知的道具を提供した点が示される。第2・第3章は同分野の草創期を扱う。著者はそこで、主にJ.R.シーリーによる「二つの帝国」モデルの提唱——ブリティッシュ・ディアスポラから成る殖民帝国とインドを含む従属帝国——およびその差別化を正当化するための彼や他の歴史

家（E.A.フリーマン、ジェームズ・プライス、J.A.フルード）による「科学的」・人種主義的な歴史叙述を照射する。

第4・第5章は世紀転換期における「二つの帝国」モデルの制度化（オックスフォード大学バイト植民史講座をはじめとした大学・研究機関での精緻化や教育など）、と同時に、インドやアフリカで台頭するナショナリズムによる同差別的モデルへの挑戦を描く。しかし著者によると、そうした初期の反植民地主義はリベラル帝国主義者の歴史叙述に根本的変革を迫るものではなかった。

第6・第7章では、1920年代・30年代にテュートン人種、アングロ・サクソン人種を中心主体とする帝国史叙述がいかに書き直され、しかし一方で「二つの帝国」モデルが緊張や矛盾を内包しつつも、いかにして新たなナラティヴ（アルフレッド・ジマーンらの「第三次イギリス帝国」論）の中で保存されたか、を描出する。戦後、脱植民地化が進む中での帝国史研究はそのような「コモンウェルス」ナラティヴへの反動かつその遺産の継承の中で展開された。終章はその二面性を扱う。

解釈上の細かな点を言えば、疑問を呈したくなる箇所も散見される（例えば第7章における「第三次イギリス帝国」論者のナショナリズム観の解釈は、管見の限り正確ではない）。しかしヴィクトリア朝後期のシーリーから脱植民地時代のジョン・ギャラハー、ロナルド・ロビンソンに至るまで、帝国史と現実の帝国統治・政策、国際政治の動態的絡まりをマクロな時間軸の中で描き切った独自性は、イギリス帝国思想研究の重要な一ページとなろう。政治思想史・帝国史・国際関係史に跨る分野横断的・複眼的な観点から読まれるのに相応しい。

* C. Bridge and K. Fedorowich eds., *The British World* (Frank Cass, 2003); J. Belich, *Replenishing the Earth* (Oxford UP, 2009); D. Bell, *Reordering the World* (Princeton UP, 2016)など。

グラムシは二度死ぬか

—Mark McNally ed., *Antonio Gramsci* (Palgrave Macmillan, 2015) を読む

千 野 貴 裕 (早稲田大学)

グラムシと聞くと、「ヘゲモニー」や「市民社会」といった概念が、その不明瞭さとともに即座に連想される。これらの概念は、グラムシを好んで論じる者たちの嗜好と必要に応じて変幻自在に使用されており、概念の意味内容はこうした議論を通じてより不明瞭になっているように見える。これは問題だろうし、グラムシもそれなりに重要なところはあるだろうが、時間を費やしてグラムシを読みこむ必要があるとはあまり思えない。——政治思想研究者のグラムシ観は、おおよそこの辺りに収斂するのではないだろうか。このようにグラムシ理解が妨げられてきた理由のひとつは、著者自身がその主著『獄中ノート』(以下、『ノート』)の内容を読者に向けて編集せずに死んでしまったため、読者がグラムシの意図を再構成するという編集作業を担わなければならず、そのためにはテクストを構成する文脈への知識が必要とされてしまうという過大な要求にあるだろう。加えて、こうした性質をもつ『ノート』が断片的記述を極大化するような読解を許してしまうゆえに、どれが信頼できる二次文献なのかを特定しづらいことも一因であろう。しかし近年、イタリアにおいて、グラムシのテクストを歴史的かつ文献学的に緻密に読解しようという動向が生まれてきた。その最良の成果は『グラムシ事典 1926-1937』(Guido Liguori and Pasquale Voza eds., *Dizionario gramsciano 1926-1937*, Carocci, 2009)であろう。『ノート』におけるタームの出典箇所を示しながら、その用法の変化を丁寧に辿ったこの事典は、今後のグラムシ研究にとって大変有益である。この研究動向は、ここで紹介するマーク・マクナリー(西スコットランド大学)の編著にも反映されている。彼は、英語圏の主要ジャーナルにグラムシ関係の論文を載せ続けている若手であり、彼の論文の多くは、歴史的文脈を念

頭においたグラムシ研究を提示した上で、その現代的意義を模索するという構成になっている(もっとも、英語圏にはイタリアに比べて冷静な見方もずっと存在していた)。

本書は、「歴史的文脈」「重要な論争」「主要な諸概念」「現代的意義」の全四部から構成されている。収録論文は全10本であり、最初の三部はそれぞれ2本ずつ、第四部のみ4本という配分になっている。本書に所収された論文のうちまず紹介したいのは、第一部の1本目に配置された、編者マクナリーの論稿“Gramsci, the United Front Comintern and Democratic Strategy”である。一般に、グラムシのユニークさがその西欧的な視点(陣地戦や市民社会など)にあるとされているのに対して、マクナリーは、グラムシの東欧的な要素として、統一戦線論に注目する。西欧における革命の困難さを認識した上で、1921年から22年にかけて、コミニテルンは社会民主主義勢力との同盟と、利害を共にする諸階級(とくに農民)との同盟を模索していた。結党間もないイタリア共産党の代表として、グラムシは1922年から翌年までモスクワに、次いで24年までウィーンに滞在した。マクナリーは、この時期にグラムシが統一戦線論を受容したことは、『ノート』における、大衆の「常識」的世界観への注目、南部の農民の歴史的状況、諸勢力の「力関係」、また、リソルジメントにおける共和派同盟の形成の失敗などの分析という、彼のユニークな知見の基調を成していると主張する。統一戦線論は、このように重要な論点でありつつも、さほどの研究がなされてきたわけではないため、マクナリーの貢献は貴重である。

しかし、論証不十分な点も散見される。第一に、なぜグラムシは統一戦線論を受け入れたのだろうか? グラムシが統一戦線論を受容したの

は、評者の知る限り、23年8月になってからである。それ以前には、彼は統一戦線論に対して明確な拒否を示していた。なぜこの変化が起きたのか、マクナリーはまったく議論していない。第二に、グラムシは何のために統一戦線論を受容したのだろうか。マクナリーも指摘する通り、統一戦線論においては、あくまで共産党が中心となり運動全体を指導していくとされ、その中心性を脅かすような同盟は認められない。だとすると、『ノート』における様々な分析は、大衆を動員するための、純粹に道具主義的な議論であったのだろうか。

第一部を構成するもう一本の論文は、ジェームズ・マーティン（ロンドン大学ゴールドスミス）による“Morbid Symptoms: Gramsci and the Crisis of Liberalism”である。彼は、グラムシの概念の多くがイタリア自由主義の伝統に由来するものであることに注意を促しつつも、研究史上にしばしば見られたように、グラムシをマルクス主義者としてよりも自由主義者として描こうとする傾向を退ける。グラムシは、自由主義的概念を流用することで、現代国家の統治における同意の重要性、イタリアにおける同意の社会的基盤の弱さ、多様な人民の統一性を確保する政党の位置などを論じた、「移行期の思想家」なのである。“Morbid Symptoms (病的な兆候)”とは、「危機は、古いものが死にいく一方で、新しいものが出現できないことに存する。この間隙には、様々な病的な兆候が現れる」という『ノート』の一節(Q3, 34)に由来する。これを念頭に、マーティンは、社会民主主義体制の崩壊と新しい秩序の不在の合間にある、移行期のわれわれにとっての補助線としてグラムシを捉え直す可能性を示唆する。

この論文にもいくつかの問題があるだろう。第一に指摘できるのは、一体何をもってグラムシの自由主義的要素と呼ぶかである。マーティン自身が指摘するとおり、19世紀から20世紀前半のイタリア自由主義は多様である。彼が挙げる範囲に限っても、モスカ、ジョリッティ、エイナウディ、クローチェ、サルヴェーミニ、アメンドラ、そしてゴベッティといった人物の「自由主義」は

相當に異なる。マーティンによれば、グラムシは、リソルジメントにおける稳健派のヘゲモニー的勝利という歴史観ではクローチェとの、また非革命勢力との同盟の必要性という政治的観点ではゴベッティとの親和性をもっていた。彼らの議論を「自由主義」とくくってしまうことによって、その種差性が見失われてはしないか。また、イタリア自由主義の種差性を考える上では、モスカや、グラムシが愛読した南部主義者サルヴェーミニとの関係が不可欠な論点であるように思われるが、議論されていない。第二に、マーティンが示唆するように、イタリア自由主義が国家統合と密接に結びついているとしても、未完のリソルジメントに対する強迫観念は、狭く自由主義のみならず、19-20世紀のイタリア思想を広く特徴付けるものではないだろうか(cf. ノルベルト・ボッビオ『イタリア・イデオロギー』馬場康雄・押場靖志訳、未来社、1993年)。だとすると、国家統合に対するグラムシの強迫観念もまた、必ずしも自由主義の伝統に属すものとは言えないだろう。

第二部から紹介したいのは、アレッサンドロ・カルッチ（オックスフォード大学）による“Gramsci, Language and Pluralism”である。カルッチは、自由主義的かつ多元主義的（したがって非マルクス主義的）なグラムシ読解を1970年代から提示し続けているフランコ・ロ=ピーパロの議論を再検討する。ロ=ピーパロは、グラムシがその言語学研究において、言語の自生的発展や多言語主義を擁護したことをグラムシの多元主義と理解する。同様に、グラムシのヘゲモニー概念も、市民社会の複雑性や偶然性といった多元主義によって成り立つのであって、政治的にもグラムシはマルクス主義的というより多元主義的であると主張した。カルッチはこの議論に批判を加える。第一に、言語の多元主義はプレオブラジエンスキーやブハーリンの議論の反映でもあると思われる事が挙げられる。つまり、言語の多元主義をもって、彼が非マルクス主義的であるというのを受け入れられない。第二に、言語の多元性がすぐさま政治の多元性を意味する理由は何かという疑問が提起される。カルッチは、市民社会の多元

性はヘゲモニーの前提でありつつも、暴力装置を担う狭義の国家の存在もまた前提とされていることを指摘する。指導階級は、強制力を背景に大衆の同意を獲得していき、共産主義社会の建設に至る。つまり、グラムシが言語的に多元主義者であることと、政治的に全体主義者であることは矛盾しないのである。

評者には、カルッチによる第二の批判の論理展開には疑問符がつくものの、そのロ=ピーパロ批判は全体として妥当であると思われる。だが、カルッチもロ=ピーパロと同じ失敗をしてはいないだろうか。つまり、言語的多元主義者と政治的全体主義者という強い二項対立的グラムシ理解を作り上げてしまっているという点である。カルッチには、なぜ言語的には多元的でありつつも、政治的には全体主義的なのか、という問い合わせに答える必要があったのではないだろうか。

第三部に“Conceptions of Subalternity in Gramsci”が所収されているグイード・リグオーリ（カラブリア大学）は、上記した『グラムシ事典』の編者でもある。サバルタンの概念は、90年代の「サバルタン研究」を通じて人口に膚浅した。この論文の目的は、この概念の『ノート』における用法とその継時的变化を追うことで、サバルタン研究で鍊成された概念がグラムシ理解に逆流してくる事態を防ぐことであろう。リグオーリによれば、サバルタンの語は『ノート』初期には、特定の集団を指すものではなく、多様な形で社会的にかつ歴史的に周縁化された人々を指す形容詞として使われていた。次いでこの語は、工業化社会におけるプロレタリアートを指す名詞として使われた。ここでは、トリーの工場労働者だけでなく、グラムシの出身地サルディニアを含む南部の農民を含む用語として使われている。第三に、この語は個人の置かれた状況を表現している。彼がモスクワの妻に宛てた手紙のなかでは、この語は、家父長的な世界における妻の周縁化された状況を表現している。

リグオーリの論文は、用語法の多様性と継時的变化を示すことのみに絞られている点で、『グラムシ事典』の延長上にある。しかし、グラムシ自

身のサバルタン論をより積極的に提示する必要はないだろうか。とくに第二の用法は、マクナリーの主題である統一戦線論とも関わる論点であろう。個人により濃淡はあるものの、文献学的研究姿勢を取るイタリアの研究者にしばしば見られるのは、グラムシの『ノート』を発展途上であり未完成なものとして捉えることにより、批判をあらかじめ回避し、反証に対する予防線を張る、というナイーブな姿勢である。歴史的・文献学的研究を行うことと、その産物としてひとつのより説得的なグラムシ像を仮説的に提示することの間には矛盾がないと評者は考えるが、リグオーリは賛成してくれないかもしれない。

以上に取り上げた4本の論文は、何らかの点で歴史的・文献学的研究の動向を反映していると言える（なお、ベネデット・フォンターナの論文は紙幅の都合で取り上げられなかった）。取り上げなかった5本の論文の主張には、「どこでグラムシはそう言っているの？」といういつもの問い合わせを投げかけておきたい。本書のレビューから、グラムシ研究に新しい傾向が生まれていること、しかしそれは質的にも量的にもまだ十分とは言えないことが了解されるのではないかだろうか。一昨年はグラムシの没後80年であった。グラムシのテクストが今後も生き続けることができるかどうかは、場当たり的で近視眼的ではない、信頼に足る二次文献をグラムシ研究が提供できるかどうかにかかっているだろう。幸い、グラムシの日本語訳としては、上村忠男による『新編 現代の君主』（ちくま学芸文庫、2008年）、『知識人と権力』（みすず書房、1999年）、『革命論集』（講談社学術文庫、2017年）という良質な編訳書が存在する。日本語で読める二次文献としては、ベラミーとシェクターによる『グラムシとイタリア国家』（小池渺・奥西達也・中原隆幸訳、ミネルヴァ書房、2012年）がなお重要であろう。この本はグラムシに対する厳しい批判を行っているが、こうした批判に真摯に応答することによってのみ、グラムシは生き続けることができるのではないかだろうか。

政治思想学会「学会報告奨励賞」(2019年度)のご案内

2019年度の「学会報告奨励賞」の応募規定は下のとおりです。学会報告奨励賞（2019年度）は、2020年5月に開催される研究大会で学会報告を行う会員に対して旅費を支給するものです。自由論題で発表を考えている方は、別途自由論題の報告者募集に必ずご応募ください。ご質問などありましたら政治思想学会事務局までお寄せください（E-mail : admin-jcspt@konan-u.ac.jp）。

学会報告奨励賞 応募規定（2019年度）

1. 趣旨

本学会報告奨励賞は、政治思想学会研究大会において研究発表を行う者に対して、大会会場への移動に要する旅費（交通費・宿泊費）を支援するために設けるものである。

2. 応募資格

①政治思想学会の会員であること。
②日本国内に在住し、日本からの旅費を要すること。
③博士課程在学者、専任職（学振研究員等を含む）についていない者、学振DC、学振PD、助教等任期付きの職についている者。選考では、この順で優先するものとする。なお、身分は応募締切日時点のものとする。

3. 応募条件

①次年度の政治思想学会研究大会で発表する者。なお、自由論題での発表を考えている者は、別途「自由論題」の報告者募集に必ず応募すること。
②2019年9月13日（金）までに応募すること。

4. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類

①次の書類を上記期間に、事務局宛に送ること。

と。応募メールの件名を「学会報告奨励賞応募」と明記すること。

- (1) 履歴書
- (2) 業績書
- (3) 他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定したものは、業績書にその旨明記すること。

②審査結果は11月末までに応募者に通知する。給付枠は若干名とするが、予算状況を勘案して柔軟に運用する。

③発表終了後に領収書（旅費・宿泊費）を提出すること。

5. 支給額

交通費：4万円以内の実費。鉄道・飛行機などの座席種別がある場合は最も低いランクの座席を使用し、可能な限り低廉な割引料金を使用する。具体的な規定は事務局の判断によるため、切符購入の前に事務局と相談のこと。

宿泊費：1万円以内の実費。

6. 注意事項

①本賞の受賞者が、他の組織や受賞者の所属機関等から同様の給付を二重に受けすることは堅く禁止する。こうした二重給付の事態が生じないよう、応募者には特に留意が必要である。

②実施の具体的過程や支給額等については最終的に事務局が判断することとなるので、切符の購入や宿泊施設の予約前に事務局と相談のうえ予約手続きを進めること。

第27回研究会「公募パネル」応募者募集のお知らせ

2020年5月23日（土）・24日（日）に明治大学で開催される第27回研究会において、パネル単位での公募セッションを設けます。ここでいうパネルとは、一つのテーマのもとに複数の報告から構成されるセッションを意味します。報告希望者は、下記の要領で応募してください。

1. 募集するパネルのテーマ

- ・多様な関心からの積極的な応募を期待しますが、第27回統一テーマ「政治思想における真実と虚偽」との関連性を意識した内容を主題としたパネルが優先されます。

2. 応募資格

- ・パネルを構成する司会者と報告者が、全員、応募の時点で会員であることが必要です。
- ・2019年度研究会において、自由論題もしくはシンポジウムで報告した方は、報告者としては応募できません。ただし、司会者としての応募は可能です。また、2019年度研究会において、司会者・討論者であった方は、報告者または司会者として応募できます。司会者および報告者として応募する方は、2020年度研究会の自由論題に重複して応募することはできません。
- ・あらゆる世代からの積極的な応募を期待していますが、応募者が多数の場合には、若手研究者を優先する場合があります。

3. パネルの構成および報告時間

- ・パネルは一人の司会者と2名または3名の報告者によって構成されるものとします。
- ・各報告者は原則として同一の教育・研究機関等に所属していないものとします。
- ・一つのパネルは1時間40分です。時間を厳守して下さい。一人の報告者の報告時間の配分は各パネルの自主性に委ねますが、20分

から25分を一応の目安とします。

- ・公募パネルの進行・運営は申請した司会者が行いますが、パネル全体の開始終了時間については開催校と企画委員会の指示に従ってください。
- ・パネルの配当時間は採用決定後に他のプログラムと同時に決定し、通知します。応募者は、配当時間の通知があるまでは、大会開催中の土曜日・日曜日の8:40 - 18:00の間のすべての時間帯で参加可能であるようにしておいてください。

4. 応募手続き

- ・応募は応募代表者が行います。
- ・応募代表者はパネルの報告者または司会者のうちから選んでください。
- ・応募代表者はA4用紙に横書きで以下の事項を記入した電子ファイルを、Eメールに添付して送付してください。ファイルは、Microsoft Word、リッチテキスト、標準テキスト、PDFのいずれかの形式に限ります。
 - ①応募代表者の氏名、生年、所属、身分、連絡先、パネルの題目、パネルの意図ないし趣旨に関する説明(2,000字以内)
 - ②各報告者の氏名、生年、所属、身分、連絡先、報告の題目、報告の意図ないし趣旨に関する説明(2,000字以内)
 - ③司会者の氏名、生年、所属、身分、連絡先
- ・報告および報告原稿は日本語によるものとします。
- ・Eメール宛先
堤林剣 kentsu@law.keio.ac.jp
件名欄に「政治思想学会 2020年度 公募パネル」と明記してください。
- ・締切日 2019年9月13日(金)必着

5. 審査手続き

- ・ レフリーによる審査を経て、2019年10月の理事会で採否を決定し、その結果を応募者に通知します。

6. 原稿、配布資料

- ・ 報告者は、2020年5月3日（日）までに、報告原稿（フルペーパー）のファイルをHP担当者的小田川理事（odagaw-d@okayama-u.ac.jp）、早川理事（mhykw@ris.ac.jp）の両方にメールでお送りください。ファイルは、Microsoft Word、一太郎、PDFのいずれかの形式をお願いします。
- ・ 同一パネルの他の報告者、および司会者に報告原稿（フルペーパー）を事前に送付してください。
- ・ 事前に提出されなかった資料を、当日使用する場合には、70部を印刷し、当日持参してください。

※ 2021年度以降における、パネル単位での公募セッションの開催については、応募状況および当該年度開催校の諸事情などを考慮して、改めて審議・決定するものとします。

企画委員会 堤林剣（慶應義塾大学）（主任）
早川誠（立正大学）
重田園江（明治大学）
菅原光（専修大学）

☆この件についての問い合わせ先☆

堤林剣 kentsu@law.keio.ac.jp
件名欄に「政治思想学会 公募パネル 問い合わせ」と明記してください。

第27回研究会「自由論題」報告者募集のお知らせ

2020年5月23日（土）・24日（日）に明治大学で開催される第27回研究会において、自由論題セッションを設けます。報告希望者は、下記の要領で応募してください。

1. 応募資格

- ・応募の時点で会員であることが必要です。2019年度研究会の自由論題に採用された方は応募できません。2020年度研究会の公募パネルに司会者および報告者として応募する方は、自由論題に重複して応募することはできません。
- ・あらゆる年代からの積極的な応募を期待していますが、応募者が多数の場合には、若手研究者を優先する場合があります。

2. 報告時間

- ・報告時間は、20～25分を予定しています。
- ・採用決定後に、確定した時間を通知します。応募者は、配当時間の通知があるまでは、学会開催中の土曜日・日曜日の8：40～18：00の間のすべての時間帯で参加可能であるようにしておいてください。

3. 応募手続き

- ・A4の用紙に横書きで、氏名、生年、所属、身分、連絡先、報告題目、報告の意図ないし趣旨に関する説明（2,000字以内）を記した電子ファイルを、Eメールに添付して送付してください。ファイルは、Microsoft Word、リッチテキスト、標準テキスト、PDFのいずれかの形式に限ります。
- ・報告および報告原稿は日本語によるものとします。
- ・Eメール宛先
堤林剣 kentsu@law.keio.ac.jp
件名欄に「政治思想学会 2020年度 自由

論題」と明記してください。

- ・締切日 2019年9月13日（金）必着

4. 審査手続き

- ・レフリーによる審査を経て、2019年10月の理事会で採否を決定し、その結果を応募者に通知します。
- ・なお、場合によっては自由論題以外のセッションに組み入れることもあります。

5. 原稿、配布資料

- ・報告者は、2020年5月3日（日）までに、報告原稿（フルペーパー。形式はPDF、Microsoft Word、一太郎のいずれか）を送付してください。
- ・送付先は、(1)HP担当者 小田川理事 (odagaw-d@okayama-u.ac.jp)、早川理事 (mhykw@ris.ac.jp) の両方、および(2)当該分科会のパネリスト（司会者・報告者）全員です。
- ・報告原稿に加えてレジュメを提出される場合には、両方をひとつのファイルにまとめてください。
- ・事前に提出されなかった資料を、当日使用する場合には、70部を印刷し、当日持参してください。

企画委員会 堤林剣（慶應義塾大学）（主任）
早川誠（立正大学）
重田園江（明治大学）
菅原光（専修大学）

☆この件についての問い合わせ先☆
堤林剣 kentsu@law.keio.ac.jp
件名欄に「政治思想学会 自由論題 問い合わせ」と明記してください。

2019年7月20日発行 発行人 川出良枝 編集人 辻 康夫
政治思想学会事務局 〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学法学部 小畠俊太郎研究室内
E-mail : admin-jcspt@konan-u.ac.jp

会員業務（退会・会費納入・名簿記載事項変更・会報発送・学会誌発送）
(株)アドスリー 〒164-0003 東京都中野区東中野 4-27-37
Tel : 03-5925-2840 Fax : 03-5925-2913
学会ホームページ : <http://www.jcspt.jp/>